

野口武彦

源氏物語を
江戸から読む

講談社



野口武彦



講談社

『源氏物語』を江戸から読む

昭和六十年七月二十日第一刷発行

〈著者略歴〉野口武彦（のぐち・たけひこ）

昭和十二年（一九三七）東京に生れる。早稲

田大学第一文学部卒業、東京大学大学院中退。

現在、神戸大学文学部助教授。文芸評論家。

主著——『江戸の歴史家』『石川淳論』以上筑

摩書房、『江戸文学の詩と真実』『谷崎潤一郎

論』以上中央公論社、『悪』と江戸文学』『徳

川光圀』以上朝日新聞社、『江戸百鬼夜行』

べりかん社。

著者 野口武彦

発行者 野間惟道

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二二 郵便番号 一二二

電話東京（〇三）九四五―一二二（大代表）

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価 一六〇〇円



落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えます。

© Takehiko Noguchi 1985, Printed in Japan

まえがき

何年か前にアーサー・ウェイレイに続く『源氏物語』の二度目の英訳を完成したサイデンスティック氏が、国際源氏学会で興味深い発言をしたことがあった。昭和五十七年八月、米国のインディアナ大学で開催された講演会である。『源氏物語』は、現代日本ではもうあまり読者を持っていない。せいぜい国文学科の教室で、それも部分的に読まれるにすぎない。むしろ欧米で翻訳を通じて、「世界文学」の一つとして、エヴリマン・ライブラリーなみにその全篇が読まれているというのである。欧米の実情はともかくとして、わが国に関するかぎり、残念ながらこの観察は当てはまらずもない。実際に五十四帖を通読した読書人が、いや、途中で投げ出しても原文に取りついていた読者がいったいどれだけのものか、はなはだ心もとない感じがする。

『源氏物語』名のみことごとしと、『帚木』巻の本文をもじってみたくなる——だいいち、この洒落が通じるかどうかも大方にはおぼつかない——しだいなのだが、あえて一矢酬いておこなう、そりゃ翻訳というものの強みでしようと言いたくなる。現代日本のこととして、『源氏物

『源氏物語』が原文で読まれない実情と、この古典中の古典がもはや過去のものになったかどうかの問題とは、おのずと別箇の事柄のはずである。近代になってから、まず明治末年の与謝野晶子、戦前戦後にかけての谷崎潤一郎、そして近年の円地文子氏の仕事と、われわれは少くとも三種類の『源氏物語』の現代語訳を持っている。いくつもの日本古典文学全集、いくつかの文庫にはかならず原典がそろっていて、それなりに享受者の層があることを示している。各種の文化講座の『源氏』コースには、いつも一定数の受講者がいる。そしてその周辺には、たとえば敬して遠ざけるといふかたちでこの作品を尊重している読書人口がある。早い話が、『源氏物語』などまるきり知らなくても、行きつけのキャバレーの**カオルちゃん**が「源氏名」であるという消息に通じているなら、その人物はすでに一つの文学伝統に浴しているといえるのである。

なにもそんな逆説を弄してまで、『源氏物語』いまだ健在なり、と開き直ろうというのではない。ここで明確にしておきたいのは、現代日本といえどもその文化感覚の根底では、たとえ無意識にでも『源氏物語』の伝統のそれなりの継承がなされているという事象である。そしてどうやらその事情は、江戸時代とたいして違っていないようなのである。

『源氏物語』をなぜことさらに「江戸から」読むのか。それ以前にそもそも、なぜ「江戸から」読むことが問題になるのか。おおまかにいって、理由は二つある。『源氏物語』研究史上の事柄として、この時代に達成された数多くの考証や注釈をぬきにしては近代源氏学を語ることができ

ないというのがまず一つ。最近では『源氏物語』関係の論文の発表は、年間二百本にも達するといわれる。学界のこうした盛況が、明治百年の近代的研究の独自な歩みに支えられていることはいうまでもない。だがその出発点は、それに先行する江戸時代二百五十年の学問的蓄積から与えられたものだった。近代源氏学のエッセンスは厳密な本文批判テキストクリティクにあり、その土台の上に文学史学、神話民俗学、構造分析論などの方法を取り入れて今日まで積み重ねられてきた。発端は、ひとくちにいうなら近世国学からの離陸デイト・オフである。つまりは、この時代に滑走路がしつらえられていたからこそ可能だったのであった。

第二の、そしてこの一冊のエッセイ集が眼目になっている理由は、江戸時代と『源氏物語』との間の関係性せい、けい、それ自体の面白さである。文学史上、この時代を前代と区別する技術的要因は、出版文化の確立である。すでに慶長・元和（一六〇〇年代初頭）の頃から古活字本が、慶安三年（一六五〇）には現存最古の整版本が流布していた『源氏物語』の本文は、やがて寛文三年（一六六三）の『万水一露』、延宝元年（一六七三）の『首書源氏物語』、同三年（一六七五）の『湖月抄』などの注釈書に取って替られることになる。なかならず、北村季吟の『湖月抄』はその後長く、江戸時代全般のみか近代にいたるまで普及することになったのである。

右のことはすでに当時、『源氏物語』を原文で読む読者層にも注釈書の方がはるかに便利だったことを意味しているが、それはさておきここではまず、江戸時代の初期にこの物語の享受者のいわば中核グループが形成された事実を確認しておくことが肝要だろう。そしてその周囲には、

たとえばその梗概だけで満足する読者、その俗語訳を楽しむ人々といった具合に、享受者たちが多層的に、同心円状にひろがってゆく。詳細は以下のエッセイ群にゆずるが、『源氏物語』を「江戸から」読むことのほんとうの面白さは、じつをいうなら、江戸時代人の享受のしかたのその思い切った多様性にこそあるのだ。それらの総体をいまひらく、江戸の『源氏物語』カルチュアとでも名づけておくことにしよう。

「カルチュア」とは決してただの言葉の綾ではない。しかつめらしく「文化」などというとかえって堅苦しくなるほど、野放図に、いっそ生活感覚的に、じつにさまざまな度合で、『源氏物語』は江戸時代人に享受、というより、むしろ享_レ楽_レされていた。さきほどその伝統継承は現代日本とたいして違っていないといったが、それはなるほど等価ではあってもかならずしも等質ではなかった。封建社会に特有の身分制度が、『源氏物語』の理解と受容の態度・姿勢にも当然のことながら反映し、まさにその結果として『源氏物語』カルチュアの多様性を現出していたのである。後論と重複することを避けて、このみじかい序説ではカルチュア総体に関わりのあるいくつかの事象を窓口にしてみるにとどめよう。

『源氏物語』は、本来いうまでもなく女流文学の精華であった。ところがこの時代、それはあらかたの女性読者の手から奪われていた。少くとも、おおっぴらには推賞されなかったのである。たとえばここに、稻生恒軒なる儒医が著わした『いなご草_{ぐさ}』（日本教育文庫所収）という書物があつた。元禄三年（一六九〇）序。妊娠婦の心得をさとした本である。その一「胎教」の項にいわく、

「さうし(草紙)をよむとも、ことばも絵も、みだりなることなからんをゑらびてよむべし、(中略)源氏物がたりの類は、かならずよむべからず」(傍点引用者)と。これはいったい「胎教の法」として、妊娠中の女性には『源氏物語』を読んではならぬという教訓なのだろうか。どうもそうではないらしい。たとえ妊娠していなくとも、である。というのは、まさにそれとは正反對の事例がほぼ同時代の文献に見出されるからである。

『色道大鏡』の成立は元禄初年とされているが、その第十七巻「扶桑列女伝」(じつは京都・江戸・大阪の遊女列伝)に、「八千代伝」と題した文章がある。日本全国を遊歴して色道の奥儀をきわめようとした著者畠山(藤本とも)箕山は、この伝説的な遊女の年譜を「八千代、諱ハ尊子。姓藤原。波多野氏。寛永十二年乙亥五月朔日、播州姫路ニ生ル」といった莊重な漢文体で綴る。いま興味があるのは、その明暦三年(一六五七)の記事として、「同年四月上浣(上旬——注)ヨリ源氏物語ヲ聴ク。翌年十月、幻ノ巻ヲ読ムニ至リテ、講人病ムガ故ニ懈怠ス。惜シイ哉」(原漢文。傍点引用者)云々と書いていることである。このエピソードが実説であることを疑う理由はない。遊女八千代は、必須の教養を身につけるためにわざわざ京都から「講談人」を招いて和文を学んだ。そのカリキュラムは、『百人一首』、『伊勢物語』、『徒然草』、『古今和歌集』の順であり、前引のように『源氏物語』は『幻』巻までで途絶したのであった。

ここから見えて来るのはまず第一に、この時代ならではというべき堂上落魄——「(京)洛ヨリ講談人ヲ呼ビ」とある——の知識人と、当代一流の遊女との間での教養の需要Ⅱ供給関係であ

る。同じ『色道大鏡』の第四巻「寛文式」——ちなみに、これは『延喜式』（律令格式の一）のひそみに倣う——の「異見百首」中に、へ暇なくと読みおぼゆべきものなるは古今の歌や伊勢物語。つまり、それらは遊女のいわば一般教養課程の必須単位であった。『源氏物語』は、さしずめ選択課目といったところだったのだろう。しかし、この選択にはおそらくどこか特別なニュアンスがあった。さきの『いなご草』を思い出してみよう。通常家庭の子女には、その講読は禁止されていた。されば八千代はその身が遊女なればこそ、『源氏物語』の繙読を解禁されていたにちがいないのである。

こうした奇妙なライセンス発行——すなわち、健全な子女は読むのを許されないが、遊女ならばむしろ格が上がるという発想の時代背景には、疑いもなく『源氏物語』をもって「誨淫の書」——みだらなことを教える書物——と見なす儒学的先入観があった。それがやがていかに近世国文学と葛藤を演じ、文学思想史上たいへん生産的な論争をひき起こすにいたるかは、以下の拙稿について見ていただくほかはない。この序説では最後にもう一つだけ、幕末の国学者岡本況斎の随筆、『難波江』の『源氏物語』観にふれておこう。その第五巻の下、「婦徳の大むね」はいう。作中の女性たちのうち、紫上は「らうくしくおほどかに心やすき物からおもりに用意ふかく、明石上は「心たかき物からよくへりくだり」、花散里は「こゝろしづかに物ねたみせず」等々といった具合に、これらはみな作者紫式部が「婦徳」を物語中の女性たちそれぞれに形象化したものである、と。

実際には、これは賀茂真淵の『源氏物語新釈』、宝暦八年（一七五八）成立とされる著述中の「惣釈」の要約である。しかし、ここで況斎が国学のはるかな先達、真淵の説に賛意を表したことの意味は大きい。『源氏物語』を「誨淫の書」と見ることから「婦徳の書」とすることとの間には、まさしく百八十度の価値転換があったからである。なおまたその中間に、真淵の直弟子でありながらかならずしも師説に与せず、「もののあはれ」論をうちたてた大、国学者本居宣長が介在したことはいままさら言をまたない。

以上この序説で取り上げてきた事柄は、『源氏物語』の女性のための読書効用、という枠組みで問題を切り取ってみたにすぎない。岡本況斎は真淵の「婦徳」涵養説を「その論簡易にしてよくいひとほされたり」と評し、さらに「此ごろ女子の規則をといふものあり。その答に抄出してあたふ」と言い添えている。だが、いったい効用だけが取り柄なのか。しよせんそれらは江戸時代の『源氏物語』問題の多端さのうちの、氷山のほんの一角である。『源氏物語』が江戸文学全般に与えた文体上の、創作技法上の、構想上の、趣味上の、言語思想上の、そして最後に文学概念上の諸影響中のわずか一齣であるといつてよいだろう。そのそれぞれの観点から、『源氏物語』はさながら万華鏡のように千変万化する景観を呈する。そして、これらけっきょくは文学論プロパに属する界域の周辺には、さっきいったもっとと生活感覚的な『源氏物語』カルチュアのコロナが伸びひろがっていたのである。

『源氏物語』を江戸から読む作業は、いってみれば江戸時代の文法コードにしたがって対象を解

読する仕事であり、そのかぎりでは現代源氏学の補助学問たりうるといえる。しかしそれ以上に、この作業は今日のわれわれからいえば、こちら向きにも反作用する仕事である。『源氏物語』から江戸を読む。江戸のカルチュア総体をつかむための一つのインデクスとしての『源氏物語』。もしそれが方法上可能だとしたら、この不滅の古典は現代日本を「読む」にあたっての有力な手がかりとなることをも決して惜しまないことであらう。

目

次

まえがき..... 1

第一部 『源氏物語』を江戸から読む

一、最初の密通はいつおこなわれたか..... 17

——葛西因是の『雨夜閑話』

二、くもる源氏に光る藤原..... 40

——村田春海の『源語提要』

三、英才教育のイロニイ..... 59

——鈴木胤の『少女巻抄』

四、都会文学としての田舎源氏..... 81

——柳亭種彦の『修紫田舎源氏』

五、江戸王朝の栄華の夢..... 107

——正親町町子の『松蔭日記』

第二部 江戸源氏学入門

- 一、「もののまぎれ」と「もののあはれ」……………137
——萩原広道『源氏物語評釈』の「惣論」をめぐって
- 二、注釈から批評へ……………145
——萩原広道『源氏物語評釈』をめぐって
- 三、「語り」の多声法……………165
——萩原広道の「構造」主義源氏学をめぐって
- 四、古典文学の通俗化……………184
——都の錦『風流源氏物語』をめぐって
- 五、江戸儒学者の『源氏物語』観……………203
——熊沢蕃山『源氏外伝』をめぐって
- 六、「語り手」創造……………225
——「ものがたり」という基層

装幀——中島かほる

『源氏物語』を江戸から読む

